



2020年の年頭にあたり

プラズマ・核融合学会長 森 雅 博

令和になって最初の新年、明けましておめでとうございます。本年が皆様にとって稔り豊かな良い年になることを心よりお祈り申し上げます。

年頭のご挨拶に何を書こうか悩んだあげく、結局、新年を迎えるにあたり思いつくことを取り留めもなく書いてご容赦いただくことといたしました。

「行く年」のことでまず頭に浮かぶのは、なんといっても「平成」から「令和」に移ったことです。首相の談話によれば「人々が美しく心を寄せ合う中で文化が生まれ育つ」という思いが込められているとのこと。「令和」の意味の英語表現は外務省によれば「beautiful harmony」だそうです。そういったことも踏まえながら「令和」という元号を見つめてみて、音の響きからも文字の印象からも「良いよね」と感じた人は私だけでは無かったのではないのでしょうか。毎年その年の世相を表す漢字一文字を公募し最多であった文字が清水寺で発表されています。昨年12月12日に発表された一文字は「令」でした。「やはりそうだよね」。一昨年の漢字は「災」でした。大きな被害をもたらした地震、台風や豪雨とそこからの復興に向けての未だに続く長期の努力が数多く報道されたことが思い起こされます。昨年もまた新たな地震、台風、豪雨が発生し、それに続く被害状況や復興の報道が毎日のようにありました。それでも、新しい時代の幕開けと復興に期待したいとの多くの国民の気持ちが昨年の「令」の選択に現れているように思われます。

昨年のことでもう一つ挙げておきたい言葉は、流行語大賞受賞の「one team」です。ラグビーワールドカップにおける日本代表チームの躍進には目を見張るものがありました。普段スポーツ番組にはあまり興味のない私でさえテレビ報道に見入り、ボールの行方に息を飲み「トライ」が決まった時には思わず「オー！」と声を洩らすことが何度かありました。多くの人が元気をもらった素晴らしいプレイでした。この日本代表チームのスローガンが「one team」であったことから採りあげられた言葉です。

実はこの言葉は、私自身にとっても思い入れのある言葉です。2012年4月から2018年3月まで私はITER計画、JT-60SA計画及びIFMIF/EVEDA事業の運営に、日本の実施機関である日本原子力研究開発機構及びその組織改編後の量子科学技術研究開発機構において、核融合研究開発部門を総括する立場から深く関わっていました。ご承知の通り、いずれも多くの最先端技術を統合した未曾有の規模の装置を国際共同で建設するという極めて難度の高いプロジェクトです。この難事業を進める中で、プロジェクト完遂のためには関係者全てが力を合わせ「one team」となって課題に立ち向かうことこそが極めて大事だということを実感することが度々ありました。「one team」を築くためには最終目標の共有と信頼関係が重要であり、時間をかけたコミュニケーションの積み重ねによって培われるものと思います。思うに、人が何か事をなそうする殆ど全ての作業は、多かれ少なかれ複数の人が関与して初めてなすことのできる共同作業（プロジェクト）ということができるでしょう。一人でやっているつもりのものでさえ、家族や友人の理解と支えが無ければなし得なかったということが多いでしょう。そういう意味で、「one team」という言葉は人の活動において常に重要なキーワードであり、これからもずっと意識しておきたい大切な言葉だと思っています。

最後に本学会長として一言。学会の活動をしっかりと進めていくうえで、学会員の声を汲み取り活かしていくことが理事・理事会の役目と考えています。ご意見やご提案がありましたら是非とも理事にお伝えいただくか、学会事務局にお寄せいただくとありがたく存じます。学会員のための学会員による学会活動を皆様と一緒に盛り上げていきたいと思っていますので、よろしく願いいたします。

